

.....
随 想

フ オ ス 随 感

木 寺 淳*



南仏のマルセーユから北西へ約 70km, 大ローヌ河がゆるやかに地中海にそぐところフオス・シュール・メールに, フランス第 2 の近代臨海製鉄所, SOL-MER 社のフオス一貫工場がある. 一昨年の暮, 国際鉄鋼協会の環境委員会がマルセーユで開かれ, これに出席した私はフオス製鉄所を見学する機会に恵まれた.

製鉄所のあるフオス港はマルセーユの第 4 の港といわれ, マルセーユ港湾庁の管轄下にある. 「モンテクリスト伯」のシャトー・ディフで有名なマルセーユ市内の古い港は, 既に観光と漁船の波止場となり, 地中海最大の水揚げを誇る港湾機能は, 市の北方ラ・ジョリエットからミラポーに到る延長 26 km の棧橋地区に移っている. 戦後更に, 北側に石油の輸入基地として第 3 の港ポルト・ド・ブックが開かれ, ここから石油や天然ガスのパイプラインが, 遠く北部フランスや欧州中部の工業地帯にまで延びている. そして, 1960 年代には, 南仏後進地域の工業化計画の中核として, フオス港の後背地に一大コンビナートの建設が進められてきている.

ローヌ河口の三角地帯は, “カマルグ” と呼ばれる一面の湿地帯で, その大部分は自然国立公園とされている.

ドーデの戯曲『アルルの女』の舞台となつたところで, 無数の沼沢が野原と入りまじり, 野生の白馬が長いたてがみをなびかせ水しぶきを上げて走る姿や, 白鳥の群れが葦原の上を飛び交う美しい光景はフランス映画でよく見かけるところ. この原野を 7000ha きり拓いて一大工業地帯とし, 十数社にのぼる重化学工業が各種の生産施設を建設しているさまは, まさに威容である. 7000 ha といえば, 日本の苫小牧東部の開発計画よりひと回りもふた回りも大きいコンビナートで, 日本では環境問題や住民の反対のために折角の計画も行き悩んでいるのにひきかえ, フランスでは自然公園地帯のそばに, このような大開発を滞りなく進めることができる社会情勢をひとしお羨しく感じたのであった.

フオス製鉄所はこのコンビナートの中心に位し, 粗鋼年産 700 万 t の規模を目指しており, 将来は 2000万 t まで拡張し得るよう用地は 1540 ha を占めている. 現在は第 1 期計画の段階で, 280 t LD 炉 2 基, 90 インチ幅ホットストリップミル 1 基を持つ年産 350 万 t の能力に対し, 製鉄設備は炉容積 2175m³ の高炉 2 基となっている. 日本ならさしずめ 4000m³ 級の高炉 1 基で始めるところだが, 鉄鋼業の成長率の低いフランスでは, 慎重に 2 基に分けて建設している. それでもなお, 2 基目の高炉を火入れした途端, 石油ショックによる景気停滞に会い, これを吹き止めて高炉 1 基の片肺操業に戻れることを余儀なくされていた. 北部フランスの旧式高炉を止めてでも, この新鋭設備を動かすべきところだが北部の工場に労働問題がおこる上に, 輸出市場も不振の折から, 製品のホットコイルは北部の工業地帯へ陸送せざるを得ないという事情も加わって, 思うにまかせないとの説明であった.

昨年暮に同じ環境委員会で欧州を訪れた際も, 景気は依然不振をきわめており, 欧州鉄鋼界では, 日本からの鉄鋼輸入の防遏論争と E C 委員会の鉄鋼危機宣言をめぐる論議が, 火を吹いているさなかであった. なかでもフランス鉄鋼業の苦悩が最もひどいようであった. 会議の昼食時には, 自然このことが話題の中心になり, 対日輸入問題については独り防戦にこれつとめたが, フランス代表のいる隣のテー

* 本会監事 川崎製鉄(株)環境管理部長兼設備計画部長

ブルに気をつかいながら、フランスが一番悪い、それに較べれば自分の国はまだまだとささやく欧州代表も幾人か居た。

たしかに、フランス鉄鋼業は現在不振のどん底にあつて、根本的な構造改善を迫られており、その困窮の度合は、日本の平電炉業に匹敵するとも劣らないといわれている。フェリー鉄連会長は、危機の原因として次の3点をあげている。第1に年間売上高の96%にも達する借入金の増嵩、第2に過去15年間販売価格の上昇を抑えられてきたこと、第3に鉄鋼業の雇用者数が多すぎ、労働生産性が他の欧州諸国に比して劣る——日本に対しては約2分の1の低さである。しかし私は、低品位のミネット鉱石に依存する北部工場の高炉では、ヨークス比が高く、石油ショック後のエネルギーコストの上昇に耐えられなくなつたことも、大きな原因の一つではないかと思う。果たして年が明けると、ユジノール・サシロールなどロレーヌ地方に基盤を持つ有力鉄鋼グループを中心に、2万人近いレイオフ・解雇の計画が、1983年を目標に進められるというニュースが、相次いで報ぜられている。フォスの第2期建設計画など設備近代化に対し新たな国家援助を要請するにも、その前に抜本的な合理化計画の提示を迫られているからであろう。

ところで最近フランスでは、元閣僚が著したフランス人批判の本が出て、一躍ベストセラーになつているという。題して『ル・マル・フランセ (フランス病)』、著者はドゴール・ポンピドー両政権下に7回も閣僚をつとめたペールフィット氏。“フランス病の最大の根源は、中央集権の強大な官僚主義に発しており、これが、フランス人を、管理する少数のエリート層と管理される大衆の二つのカテゴリーに分けてしまつたことにある。そしてその大衆は権威に頼りすぎ、時代に対する適応を要請されていてもこれを理解しようとしなない……”というのがその趣旨のようである。イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』以上のブームが、フランスでおこつているということは、フランスの輝ける栄光が経済でも外交でも落ち目になりつつある現状を、知識階級を中心に痛感し始めた何よりの証拠であるのかも知れない。時あたかもフランス鉄鋼の研究・開発調査団が来日し、われわれの工場や研究所をつぶさに視察してまわつているのである。

わが国鉄鋼業も、低成長の時代に入つてもう2年になる。景気回復の兆しがあれば、過去の伸び程とはいわぬまでも、幾分の需要の回復を期待した時期もあつたが、その期待はうたかたのように消えて、不振の長い時期が続くのである。フランス鉄鋼業の苦しみとするところは、程度の差こそあれ、本質はわが国にとつても同様である。もつて他山の石とすべきは論をまたないのではあるまいか。

製鉄技術の研究・開発の分野においても、その方針を見直すべき時期がきている。低成長の時代にあつては、省力・省エネルギー・省資源等コスト低減方策の研究は、その比重をいよいよますますであろうし、製造仕様の厳格化・製品品種の多様化などの要請は、需要家からますます強まってくるからである。